

京鹿子

平成二十七年七月一日発行
第百一〇九号(毎月一回一日発行)

7月号

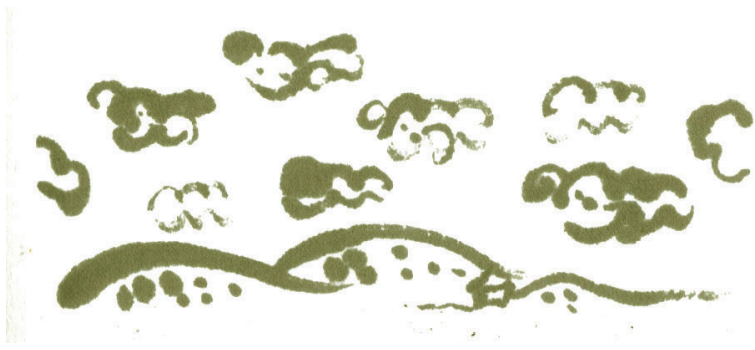
夏季吟旅特集号

豊田都峰
叡林集 その七



山ひとついのりの数の春の燭
石狐守る山の祠はわくら葉摘む
みどりして包みきれざるウケノミタマ稲魂
草笛や遠き日のごと星ともる
したたれる草笛に野の星もまた
草笛のこだまがへしのひとつ星

竹の秋神を鎮めていく代なる
川すぢの緑陰拾ひきて寺門
一燈を阿弥陀に捧ぐ青葉界
禪定の印まんなかの大緑陰
山内は今禪定の木下闇
日の青葉他力念仏湧くがごと
青葉界即結界の祈りなる
白川に沿ひ涼風を親しくす



— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

無垢の風

水郷の湖を平らに舳涼し

(近江八幡水郷巡り)

舟遣れば有情漂う葦青し

(")

緑さす札所に立てば無垢の風

(長命寺西国三十一番札所)

— 追 懐 — (その十一)

葱坊主力士志願の瘦せつぼち

(平成四年作)

大みどり宙に延びたる麒麟の木

(平成四年作)



— 近 詠 —

和田 照海

廃校の島

送 辞 な き 廃 校 の 島 卒 業 す

忘 れ 潮 ま た い で 跳 ん で 摘 む 磯 菜

卑 弥 呼 説 眉 つ ば に し て 蛸 蛸 の 国

揚 雲 雀 注 文 だ け の 村 鍛 冶 屋

惜 春 や み 幸 野 わ た る 軽 便 車

秀華採集

芽木渡る風は次第に軽くなり

加藤 翅 英

芽を誘おうとして始めは懸命に吹く風も、相手が応え始めると「次第に」肩の荷を下ろし始める。そのあたりを「軽くなり」と表現する。まさしく「芽木の風」になりきつてのことと評価する。ひ七つの思い入れである。

薬壺に清明の気や如来像

大西 逸子

童にも鎧甲冑花の城

生田 あき子

薬師如来に「清明の気」を満たしたこと、また戦国の世の生き様を「花の城」と組み合わせ、それなりの華やかさを描き出したこと、ともに評価する。



神麓集

松の花 藤岡 紫水
 厨子深く拝す秘佛や春の燭
 彼の人の寄り添ふ気配春灯
 一刻のまさに千金大朝寝
 春惜しむあるかなきかの雨を聞き
 死と生は裏と表や松の花

薄 暑 松本 鷹根
 著我風の奥に水音間の峰
 峰新樹むらさき淡く街沈む
 藤棚に風の私語あり湖晴れる
 葦の芽の直情眩しおとせ浜
 遠き帆に回顧の白き湖薄暑

沈黙は鋭利な声ぞ冴返る
 過ぎし日の夢に疲れて椿落つ
 極道な猫の居付きし三月寒
 こだはらぬことがおしやれか三月来る
 うすれゆく記憶ひらひら春の雪

松田 都青

花今宵 北川 孝子
 花今宵木椅子に涙もろく居て
 いつよりの自愛の歩幅さくら東風
 二円切手の兎跳ね出す若草野
 サイタサイタ学びて老いし桜東風
 高瀬舟むかしを今にうらら濃し

魔界 丸井 巴水
 本流に架かる朱の橋弥陀ざくら
 指輪 抜く葉指なる万愚節
 花冷のここより魔界飴を買ふ
 おそ櫻散らせし風のさくらいる
 抹茶白ゆるりと回り夏来る

薔 薇 塩貝 朱千
 逆光のとき黄の薔薇を昂らす
 青年は薔薇はバラいろ好きという
 ばら散らす駈ける小犬と少年と
 薔薇揺らしやさしき言葉待つてぬし
 もえ尽きて火の粉を散らす風の薔薇

夏季吟旅特別吟

豊田都峰

石州路雲州路

新緑の山幾重なる毛利領
美作はいづれみどりの峰果無
人麻呂は遠流か藤の峠また
夏草や悲喜なる間歩の穴いくつ
坑道は闇埋めつづけ病葉降る
冥茫の間歩幾百や青葉若葉

青葉なる底銀鉞は夢の夢
常盤木落葉埋めても埋めても名は銀山
薫風となり石洲から雲洲へ
国つ神鎮め青葉のあますなし
出雲風土記青葉飾りの一頁
篝火や青葉の宴となりゆけり
老鶯のまたもまねくや水景めぐり
新緑を解かす水路に城あほぐ
薫風のみがく大山旅の果つ



京鹿子集

豊田都峰選

芽木渡る風は次第に軽くなり

京都 加藤 翹英

日の入りの快樂の中へ雲雀落つ

弥陀堂の落花しきりに雨後の庭
磯遊びとは名ばかりの岩づたひ

途方もない空を信じて揚雲雀

初蝶や折り紙蝶に恋心

アリゾナ 伊吹 之博

雲紋の木肌やぴんと花梨咲く

庭園で折り紙展示蝶の昼

葉壺に清明の気や如來像

大西 逸子

逝く春の内陣冥く十二神将

イースター垣根のない家招かれて
独り住まひそれもまたよし黄水仙

伐折羅像霾る宙を睨みをり

水温むきらきら流る庭の川

オハイオ 水谷 直子

矢印は直哉旧居へ花あしび

箱の中眠れる雛に祖母想ふ

童にも鎧甲青花の城

洲本 生田あき子

春祭古参揃ひて鉦太鼓

春昼やほんやり故国ペン落し
春夕焼ピンクに広がる西の方

野放図に育ちし果ての葱坊主
札 幌 野村 鞆枝

たかだかと変体仮名の鳥帰る

若草を踏みたし西へ旅立てり

水底に芽吹くもの有り散歩道

春の雪流れの中に降り続け

土手伝ひ一番乗りや露の臺

雪囲解く手もとに軒棧

梅が香を部屋いつばいにせし花瓶

蒼き空梅咲く下を登校児

登校児先頭の子の大マスク

梅咲きて孫の片言大人びて

母スマホ胸の児眠り春の夢

葦青むモネの好みの橋架かり

鶯鳴く山はいろ濃く膨らみぬ

水暖か列を糺して鯉の群

生と死を分けし濤音島ざくら

少年の頬にかみそり桜どき

白地をばあからさまとは四月馬鹿

紅梅やほとほと遠き日をたぐる

花の山まぬがれがたく老いるかな

踏切の先もわが町花万朶
春雷や砂落ち切つてゐる時計

補助輪がとれたよクロツカス開く

千年の櫃の走り根春の蟬

花菜満つ向かうの岸も足もとも

パラグライダー降り大波小波の花菜かな

シミユレーターの春の巴里よ少年よ

初音聞く鬮伽桶に泛く妻の顔

詠みたらぬ頭に拳水仙忌

コカリナ吹く春の小川のささやきに

春泥にまみれ子の齡隠しをり

春眠を破る救急車の波動

老幹に胴吹きの花飛翔せり

夜桜や小さき闇に躓きて

葦芽ふく亀はばあんと向き合へり

山は上野狐と狸花競ふ

いつかくるときを吾しる御松明

啓蟄や肩肘のぬけ一張羅

黙し去り男いつびき春彼岸

春うらら指はこよりのしぐさかな

どの絵にもでかいお日さま山笑ふ

あれそれで通じる会話春炬燵

支へ合ふ余生しみじみしじみ汁
生き方はそれぞれ蝻の道纏れる

布川 孝子

松山 敦子

岡山 紫泉

上野 孝之

元橋 孝之

金子 正道

船橋 孝之

伊藤 希眸

神田 惣介

千葉 伊藤 希眸

直江 裕子

高野 春子

高野 春子

高野 春子

高野 春子

高野 春子

高野 春子

高野 春子

高野 春子

高野 春子

高野 春子

強東風や忽と消えたる赤ポスト

東京 野中 圭子

小春日や川の流れに歩を合はす

春の雨古都に律儀な珈琲店

後ろより言葉空耳春の風

襖絵を抜けて来たらし蝶交じる
ゆきゆきて谷の板はし蛸蚪の国

梅白し病ひと付合ふ者同志

丹羽 武正

うつくしさわがものとせせず梅ひらく

幻の母来てしるつめ草を編む

雲間より洩れくる日差し春の宵

春の雨野は雑草の階をなす
たんぼぼや目の前にある大き足

例年のやうに賑やか雛の夜

かたくなな心の淋し黄水仙

瞑想し一呼吸おく柳の芽

老境の落ちつく処紅椿

惜春や小町通りの人の中

岸上 道也

もどかしき身体を包む春の月

賑はひの下谷寺坂春彼岸

文学館花の万朶にささし

種袋こぼしつ持つ長男坊

紋黄蝶れいがん橋に日を放つ

湯けむりを黄色に染める初音かな

雨音に春の兆して一人の夜

中西 明子

バラの芽を二寸伸ばして雨上る

春は曙影ゆらしつつ露天風呂

囀りのリズム高まる目覚め時

囀や茶を一服の贅満たす

花開く心も開くバスツアー

福島 照子

道問ふや耕す鋤をもて答ふ

歳月や角をけづりて雪解川

巡り来る母の忌巡り咲く山桜

鉄面の鼻の尖りさくら散る

春風駘蕩ゆつくり登る八十路坂

梅ほつほつ盛り砂凜と武家の門

深吉野は降りみ降らずみ花の鐘

蜆汁効能言ひてすすめをり

水温む紐吊るしたり網張つたり

耳裏に山脈わたる東風をきく

高島正比古

如月や無になり切れぬ写経の座

葉湯を吹きさまし飲む木の芽どき

河島 坦

中島悠美子

中村 三郎

児玉 有希

神田美千留